

新語・流行語の定着の法則性について

太田 彩 英

1. はじめに

一般的に、流行語は定着せずに消えてしまうもの、と言われていた。だが、一例として、森下喜一(1985)『現代のことば』(双文社出版)をもとに調査したところ、「マボイ(=渋くてかっこいい)」や「ヤノピ(=ピアノ)」のように完全に消えてしまう語もあれば、「むかつく」や「熟年」のように流行語だったとは思えないほど定着した語も存在していた。そのため、そこにはどのような法則性があるのか、疑問に思った。同時に、もし具体的な法則性がわかれば、未来で定着する可能性のある語を予測することもできるかもしれない、と考えた。

よって本研究は、明治1(1868)年から平成29(2017)年までに生まれた新語・流行語の使用数を、1年ごとに新聞記事データベースによって調査し、その調査結果をもとに定着の法則性を探り、最終的には2018年の新語・流行語大賞ノミネート語の中で定着していきそうな語を予測することを目的とする。なお、流行語だけでなく新語も含めているのは、新語の中には流行語としての側面をもつ語も多くあり、その線引きがはっきりしないからである。

2. 先行研究

新語・流行語に関して、その分類を述べた先行研究には、水原明人(1997)がある。

水原(1997)は、全ての流行語は以下の3つのグループに分けられると述べ、それぞれについて具体例を挙げながら説明している。

- ・「一過性の流行語」：メディア発の言葉・ヒット曲・人気漫画・小説・若者言葉などから生まれ、あっという間に爆発的に広まって1年か2年で泡のように消えていく。
- ・「時代的流行語」：世の中の思想、風俗、生活の変化の中から生まれ、成長し、時代の変化とともに消えて、何時かは死語となる運命を持っている。
- ・「普通名詞化する流行語」：その言葉を生んだ土壌が後々まで変わらずに続き、いつまで経っても古びない or ある現象を表現するのに、その言葉があまりに適切であるためにほかの言葉に変えられない。

また、新語・流行語の定着に関しては、寺川みち子・浅井里美(2001)がある。

寺川・浅井(2001)は、昭和6(1931)年発行の『新語辞典』所収語が60年後の平成3(1991)年発行『広辞苑第4版』に掲載されているか否かを調査し、残る言葉と使われなくなる言葉にどのような特徴があるかを分析している。調査の結果、音楽・文具・建物・美術・衣類に関する語は特に残りやすく、サービスの職業・機械・老若・仲間・統治に関する語は特に使われなくなる傾向があるとしている。

また、米川明彦（2013）では、若者語・流行語が生き残るために戦わざるをえない、「他者の言語意識」や「自己の『飽き』」、「寿命」について具体例を挙げながら述べている。そして、流行語は、その発生の理由ごとに整理すると、次のような状況であるという。

- ①社会的理由（社会情勢にちょうど合う）：状況が一般化したりなくなったりすれば消えていく。
- ②心理的理由（周りに合わせる大衆心理）：一時的であるため消えていく。
- ③言語的理由（奇抜さ、新鮮さ）：使い古すと奇抜さもなくなり消えていくが、日常会話に使用できる範囲が広く、応用も利くためある程度は長く使われる。
- ④言語感覚的理由（無意味な音を感覚的に発する面白さ）：最も早く消えていく。

上村健太郎（2014）は、「Google Trends」（ある特定の語がGoogleで検索された語の総体と比較してどの程度の量があるのかをグラフ・数値化できるサイト）と新聞記事データベースを併用し、2005～2007年の新語・流行語大賞受賞語のうち25語の、受賞前年～3年後における検索量・新聞記事数をグラフにして考察している。その結果として、定着傾向にある語は、「代替語が存在しない語」（例：ブログ）と「行政により制定された語であり、使用の必要性のある語」（例：猛暑日）であり、衰退傾向にある語は、「娯楽、スポーツ、政治に関する語」と述べている。

以上のような新語・流行語に関する先行研究の傾向としては、以前は執筆者自身の内省・持論によるものや、辞書調査・アンケート調査によるものが多かったが、ここ数年で新聞記事データベースやGoogle Trendsを用いた研究も増えている。しかし、管見の限り、それらも現代に入ってからの短期間（バブル期のみ、3～5年間のみなど）を対象としているものである。そのため、明治時代や大正時代に流行して今では完全に定着した語、あるいは、完全に消えてしまった語などといった、比較的長期間の動向をみることができていない。また、先行研究では全体の対象語数が少ないため、具体的な新語・流行語の大規模な提示や計量的に時代的推移を示し、それをもとに考察するということが今後必要であろう。「音楽」「文具」などの語のジャンル分けについても、検討の余地があると考えられる。

よって本研究では、明治時代までさかのぼって新語・流行語を収集し、それらのここ数十年での使用傾向を客観的な新聞記事データベースによってみることにする。このことにより、新語・流行語の消長については上記の先行研究のような指摘がすでに見られるが、さらに定着する語の共通点などといった法則性を、新たに見つけ出すことができるのではないかと考える。

また、明らかになった法則性を用いて、今後定着していくであろう流行語を予測するというところまで言及している先行研究は、管見の限りでは見つけられなかった。そのため、そこまで考察を深めることができれば、より有意義な研究となるのではないだろうか考える。

3. 調査の概要

3-1. 使用したデータベースと検索条件

各年の新語・流行語の使用数調査には、朝日新聞の新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」を使用した。このデータベースは、見出しのみであれば明治時代の記事も検索ができるが、見出しにはなりにくい言葉もあるという点と、本当に定着する語は本文で何気なく使われるだろうと考えられる点から、本稿では全文検索ができる「朝日新聞1985～週刊朝日・AERA」のみを使用している。また、その際、以下のような検索条件を指定している。

- ◎対象雑誌：朝日新聞のみ ◎キーワード：異体字は含めるが、同義語は含めない
- ◎発行日：1990年1月1日～2017年12月31日 ◎検索対象：見出しと本文
- ◎分類：選択なし ◎朝夕刊：朝刊・夕刊とも含める ◎面名：選択なし
- ◎本紙／地域面：本紙のみ ◎発行者：東京・大阪・名古屋・西部のみ

3-2. 調査対象語の選定基準

本研究では、以下の(1)(2)の選定基準にのっとり、明治1（1868）年～平成29（2017）年までの150年間に流行した語を1年につき3語選び、計448語を調査対象とした。各年につき3語選んだ理由は、2語だと年によっては代表的な語が多すぎて絞り切れないことがあり、4語だと総数が増えすぎてしまうからである。なお、明治31（1898）年のみ、新語・流行語が1語しか挙げられていなかったため、全体の合計数が2語少なくなっている。

(1)明治～昭和

1868年～1989年までは、米川明彦（2002）『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』（三省堂）で、1年ごとに主な例として挙げられている複数例の中から、3つ選ぶ。

【主な例が4つ以上ある場合】 社会問題的要素（政治・経済・事件など）が強いものと大衆文化的要素（娯楽・ファッション・乗り物など）が強いものとが少なくとも1つずつあり、かつ関連した事例のことができるだけ重ならないように3つ選ぶ。

例）1885年の主な流行語：「一銭蒸気」（一区一銭で乗れる蒸気船）「束髪」（女性の洋髪スタイル）「内閣」「内閣総理大臣」の4つ。→「内閣」と「内閣総理大臣」は似た事柄であるため、より広い意味で使われるであろう「内閣」を選択。「内閣」は社会的であるため、大衆的なものとして残りの2語は「一銭蒸気」「束髪」を対象とする。

【主な例が2つ以下の時】 補遺編から、「4つ以上ある場合」と同様の観点で選び、加える。

例）1871年の主な流行語：「郵便」「午砲」の2つのみでどちらも国の新制度なので社会的。→補遺編に「ざんざり頭」「因循姑息」「総髪頭」「牛鍋」「書状集め箱」「統計」「語彙」の7つがあり、最も大衆的でおかつ「総髪頭」よりも検索結果の多かった「ざんざり頭」を選択する。

(2)平成

・1990年から2017年までは、自由国民社の「ユーキャン新語・流行語大賞」で年間大賞や金賞

といった評価が高いものを3つ選ぶ。大賞が2つ以下でそのほか同率の場合は、大賞の語と全く違うジャンルの語を追加するようにする。

例) 2015年年間大賞:「爆買」「トリプルスリー」の2つ。→トップテン:「アベ政治を許さない」「安心してください、穿いてますよ。」「一億総活躍社会」「エンブレム」「五郎丸(ポーズ)」「SEALDs」「ドローン」「まいにち、修造!」の8つだが、年間大賞がどちらも大衆寄りの言葉なので、3つ目は政治関係で固い印象である「一億総活躍社会」を選択する。

3-3. 調査方法

3-1で述べた「聞蔵Ⅱビジュアル」を用い、3-2で選定した448語が1990~2017年の間に使われた記事を、〈AND (&)・OR (+)・NOT (#)〉検索を駆使してできるだけ検索漏れがないようにキーワード検索をした。

【例:「あんぱん」= (あんぱん#あんぱんまん)+ (アンパン#アンパンマン)+ 餡ぱん+ 餡ぱん+ あんぱん+ アンぱん】

その後、記事1件につき、見出しまたは本文に同じ語が何度使われていても1つと数え、1年ごとに使用された記事数を表にまとめた。下の表がその一例である。

表1 明治1 (1868) 年の調査結果 (調査対象語:「明治」、「遷卒」、「文明開化」)

新語・流行語	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	計
M1 明治	1468	1243	1241	1303	1340	1337	1429	1370	1347	1653	1863	1573	1477	1671	1718	1761	1595	1803	1862	1680	1622	1400	1435	1661	1927	2052	1820	1596	44247
遷卒	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
文明開化	18	12	14	21	15	11	23	19	14	13	18	24	17	23	21	21	20	22	20	19	11	26	16	26	20	19	8	18	509

4. 調査結果

4-1. 直近4年間の平均使用数による定着度の分類

まず、調査対象語の中で定着している語とそうでない語を大まかに分けるため、2014年~2017年の4年間に使われた回数の年平均から、調査対象語を3種類に分類することにする。ここで4年間のみを対象としたのは、1~3年間だと数年おきに使われるような語(W杯やオリンピックに関する語など)の定着度が正確に測れず、5年間以上だと5年前の1年間だけ、爆発的に流行してすぐに消えてしまったような語(H25/じえじえじえ など)が定着していることになってしまうためだ。なお、2015~2017年に初めて生まれた語に関しては、公平を期すため、使用開始年に合わせて、総数を割る年数を1~3年間で変化させている。よって、実際の定着度とは隔たりがある可能性もあるが、今回は他の語と同様に結果に反映させている。

3種類の分類については、以下の通りである。

- α : $0 \leq 4$ 年間平均 < 1 \Rightarrow 死語
 β : $1 \leq 4$ 年間平均 < 12 \Rightarrow 死語になりかけている
 γ : $12 \leq 4$ 年間平均 \Rightarrow 現在も使われている

α は、年に平均1回も使われない語であり、死語と言ってよいと考えた。 $\beta \cdot \gamma$ では、12回を区切りに行っているが、これは平均して月に1度以上使われていればまだ死語とは言えない、と考えたためである。

以上の分類の結果、 α は172語、 β は136語、 γ は140語であった。

4-2. 語の意味によるジャンル分け一覧

次に、 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ を語の意味によって「スポーツ」や「政治」といった39通りのジャンルに分類した。その後、さらに大区分として「大衆文化的要素の強いもの」「社会問題的要素の強いもの」「その他」の3つに各ジャンルを振り分けた。次節以降、大区分は、「大衆文化」「社会問題」「その他」と略して呼ぶ。大区分ごとのジャンル一覧は、以下の通りである。

表2 大衆文化的要素の強いジャンル一覧

大衆文化的要素の強いもの	例
スポーツ（選手の発言・競技名など）	チョー気持ちいい、野球
お笑い（芸人のネタ・お笑い番組でのセリフなど）	ワイルドだろ、漫才
ドラマ（テレビドラマでのセリフなど）	じえじええ、ルーツ
CM（テレビCMでのセリフなど）	はっばふみふみ、それなりに
映画（タイトル、セリフなど）	失樂園、ありのまま
音楽（音楽ジャンルや歌詞など）	ロカビリー、憂鬱
マンガ・アニメ・ゲーム（タイトル、セリフなど）	ちびまる子ちゃん、ハレンチ
ファッション・美容（髪型・服装・整形など）	断髪、カーキ色
芸術（絵画など）	裸体画、パノラマ
公演（演劇・歌舞伎など）	宝塚少女歌劇、ステテコ踊り
イベント（博覧会、興行など）	共進会、イルミネーション
タイプ（特定の人々のジャンル・性質など）	みゆき族、中産階級
文芸（ベストセラーの本、文芸雑誌のタイトルなど）	青鞥、品格
若者語（若者間でのみ通用する言葉）	インスタ映え、話がピーマン
動物（話題になった動物の名前）	タマちゃん
超常現象（超能力など）	催眠術、超能力
遊び	銀ブラ、女子会
職業（職業の名前）	赤帽、アナウンサー
メディア（情報伝達の媒介となるもの）	伝書バト、スマホ
店・法人名（店の種類・会社等の名前）	勤工場、美容院
食品（飲食物全般）	アンパン、カルピス
生活用品	亀の子たわし、バケツ
乗り物（個人所有・民間主導の交通手段）	マイカー、人力車

表3 社会問題的要素の強いジャンル一覧

社会問題的要素の強いもの	例
政治（政治家の発言、選挙、政策など）	小泉劇場、日本列島改造論
行政（国により制定・施行された事柄）	人間宣言、明治、著作権
外交（外国との交渉や諸問題に関わる語）	新秩序、拉致
戦争（戦争にまつわる語）	鬼畜米英、冷たい戦争
環境問題（環境汚染に関する語）	嫌煙権、複合汚染
民間運動（労働問題、学生運動、～主義など）	サボタージュ、社会主義
教育（学校関係）	偏差値
事件・事故（事件・事故の名前、その派生語など）	逆噴射、プライバシー

世相（世の中の様子を表す語）	せまい日本、そんなに急いでどこへ行く・バブル経済
インフラ（国主導で生活基盤となるもの）	瓦斯灯、JR、幼稚園
病気（インフルエンザ、黒死病など）	スペイン風邪、インフルエンザ
災害（自然災害そのものやその派生語）	帰宅難民、火砕流

表4 その他のジャンル一覧

その他	例
天体（彗星、星など）	ハレー彗星、西郷星
宗教（宗教的要素の強い語）	救世軍、ビリケン
年代・暦	世紀、ゴールデンウィーク

技術革新（技術の進歩や新発見など）	超伝導、iPS細胞
-------------------	-----------

※表2・表3で例が一つしかないジャンルは、総数が1つだったことを表す。

4-3. 全対象語・ α ・ β ・ γ の大区分（大衆文化・社会問題・その他）ごとの割合

また、今回調査した全対象語と、それらを大まかな定着度で分けた α ・ β ・ γ （4-1参照）それぞれについて、4-2で示した大区分（大衆文化・社会問題・その他）ごとの各語の割合を円グラフで示すと、以下の図1～図4になる。

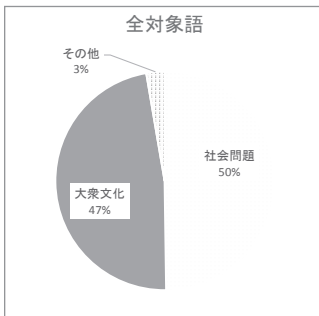


図1 全対象語の大区分の割合

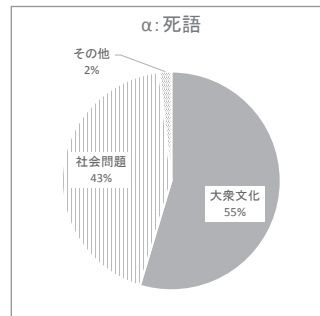
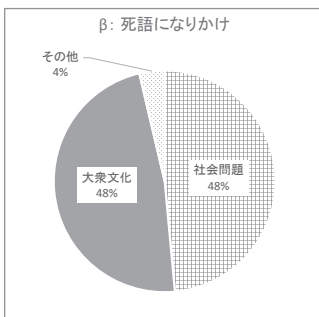
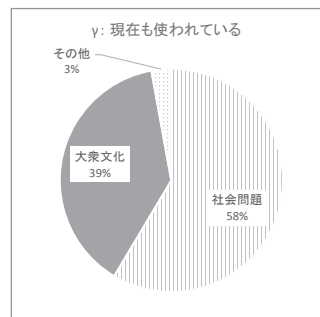
図2 α の大区分の割合図3 β の大区分の割合図4 γ の大区分の割合

図1の全対象語のグラフでは、社会問題と大衆文化がほぼ同じ割合なのに対し、図2の α では大衆文化が半数を超えている。だが、図3の β では社会問題と大衆文化がほぼ同じ割合となり、図4の γ になると反対に社会問題が半数を超えるという逆転現象が起きている。

大まかな傾向としては、大衆文化の語のほうが比較的死語になりやすく、社会問題の語のほうが残りやすいということが伺える。

4-4. ジャンルごとの $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ の割合

次に、4-2の語の意味によって分類した詳細なジャンルごとに見た場合、どれが死語になりやすいのか、どれが定着しやすく、どれがその中間なのか、などといったことを明らかにするために、1つ1つのジャンルについて考察した。

具体的には、ジャンルごとに $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ の語数を数え、それぞれのジャンルの中で、 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ のどの分類が最も多いのかによって、「特に死語になりやすい(= α が最も多い)ジャンル」「死語になる可能性の高い(= β が最も多い)ジャンル」「定着しやすい(= γ が最も多い)ジャンル」の三種類に分けた。ただし、一部、同数の分類があったジャンルについては、例外として「比較的死語になりやすいジャンル」「比較的定着しやすいジャンル」「傾向がないジャンル」の三種類に分けた。

具体的には、例えば以下の表5のように、 α の語数が $\beta \cdot \gamma$ よりも1つでも多ければ、そのジャンルは「特に死語になりやすい」傾向があるとした。そのうえで、右の図5のようなグラフを作成した。

表5 特に死語になりやすいジャンルの例

	α : 死語	β : 死語になりかけ	γ : 現在も使用
世相	21	11	13
音楽	19	7	1
タイプ	12	11	4

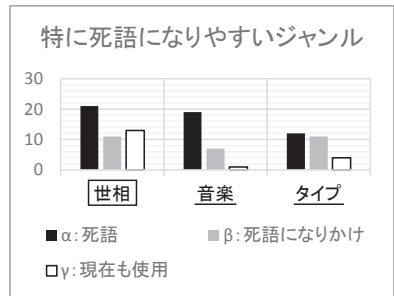


図5 表5をもとにしたグラフ

以上の観点から、全ジャンルの結果をまとめたものが、図6～図9である。なお、図5～図9のグラフの横軸は、大区分の種類ごとに表示方法を変えており、下線は大衆文化、□の囲みは社会問題、装飾なしはその他、のジャンルを表している。

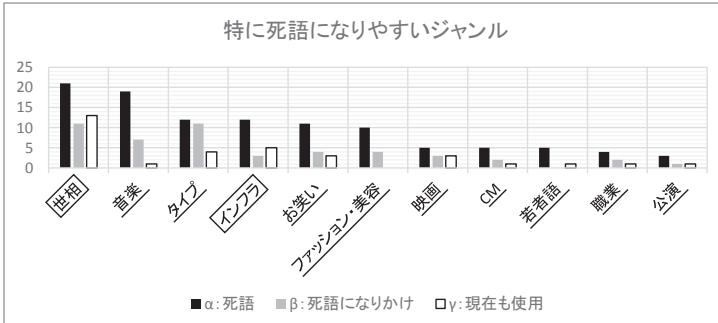


図6 特に死語になりやすいジャンル

図6の「特に死語になりやすいジャンル」では、大衆文化のジャンルが圧倒的に多く、4-3のαで大衆文化のほうが社会問題よりも割合が高かった結果と一致している。

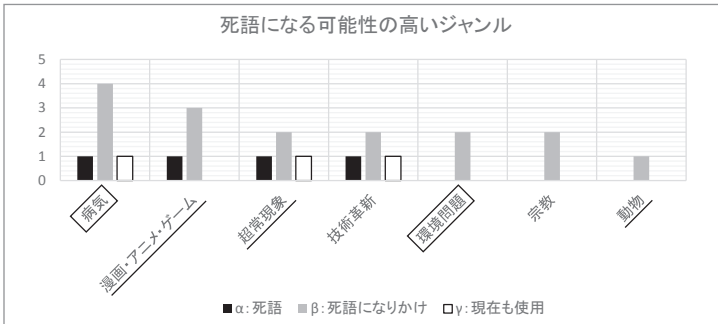


図7 死語になる可能性の高いジャンル

図7の「死語になる可能性の高いジャンル」では、大衆文化・社会問題・その他のジャンルがバランスよく含まれており、はっきりとした傾向は見られない。4-3のβで大衆文化と社会問題の割合がほぼ同じであった結果と一致する。

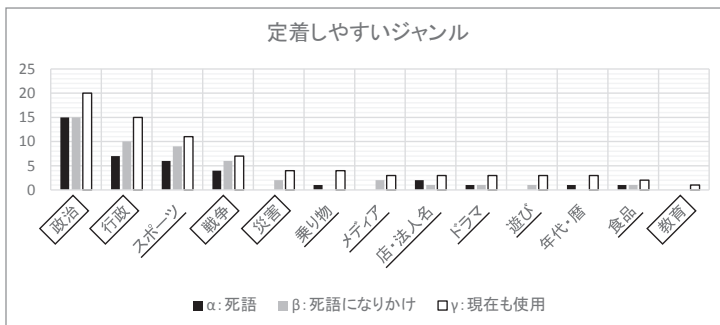


図8 定着しやすいジャンル

図8の「定着しやすいジャンル」では、トップの2つは社会問題のジャンルだが、ジャンルの種類ごとの数でみれば大衆文化のほうが多くなっている。これは、4-3のγで、社会問題のほうが大衆文化より多かった結果と反しており、一概に社会問題のジャンルのほうが定着しやすいとは言えないようだ。

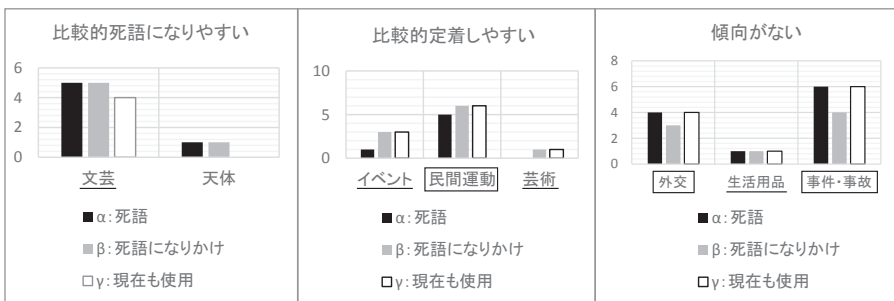


図9 比較的的死語になりやすい・比較的定着しやすい・傾向がないジャンル

図9の「比較的的死語になりやすい・比較的定着しやすい・傾向がないジャンル」の3つは、α・β・γのいずれか2つまたは3つ全てが同数のものであり、はっきりとした傾向をみることはできない。

4-5. 折れ線グラフによる分類

また、γ（まだ使われている）の語に関しては、より詳細な定着度を確認するため、3-3で述べた調査対象語の1年ごとの使用数に基づき、1語ずつ折れ線グラフにした。そのうえで、それぞれのグラフの形によって以下の図10～図15の6つに分類した。

(34)

(1)右肩上がり = 年々増え続けており、定着度が高い

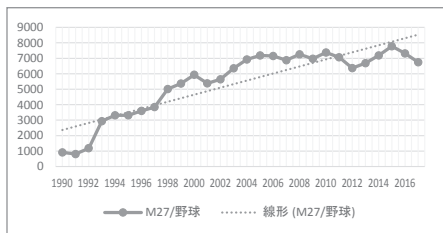


図10 右肩上がり (例: M27/野球)

(2)右肩下がり = くだらなな衰退傾向にある

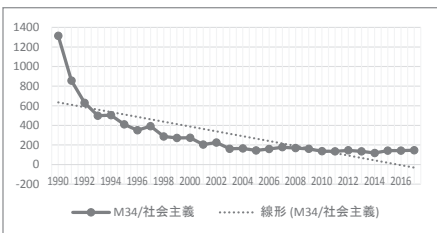


図11 右肩下がり (例: M34/社会主義)

(3)一時期急増&全体は増加 = 徐々に増え、流行時にピークを迎えた後は再び安定

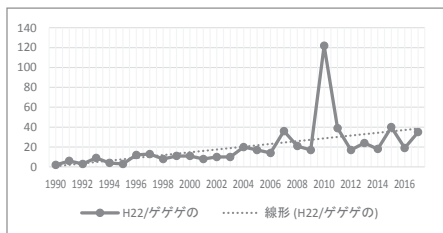


図12 一時期急増・増加 (例: H22/ゲゲゲの)

(4)一時期急増&全体は減少 = 流行時をピークに衰退傾向が続く

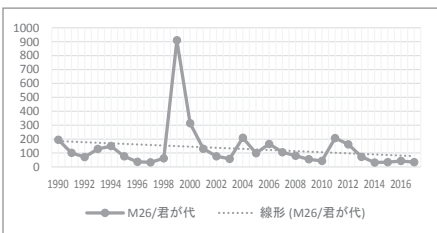


図13 一時期急増・減少 (例: M26/君が代)

(5)波型 (急増2回以上or増減が激しい) & 全体は増加 = 年によってばらつきはあるもののコンスタントに使われ続ける

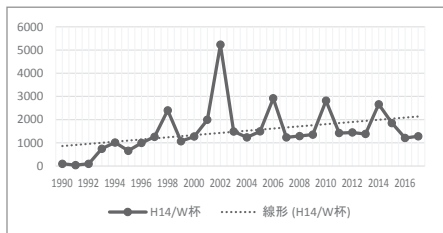


図14 波型・増加 (例: H14/W杯)

(6)波型 (急増2回以上or増減が激しい) & 全体は減少 = 数年おきに使われているが、徐々に衰退傾向

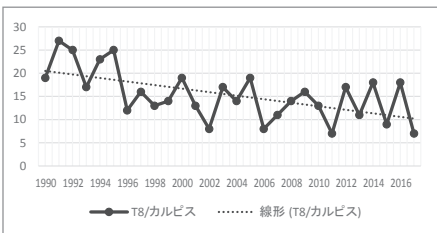


図15 波型・減少 (例: T8/カルピス)

※図10～図15では、各線形の近似曲線を付している。

また本稿では、例を示す際、3-2に基づき、流行した年を元号の略称と数字で、/の前に示している。

4-6. γ の折れ線グラフの種類ごとのジャンル割合

次に、4-5で分類した γ の6つの折れ線グラフの種類ごとに、どのようなジャンルの語が何%含まれているかを、図16～図21の円グラフで表す。その際、大衆文化・社会問題・その他の大区分により、4-3と同じようにジャンルを塗り分けしている。

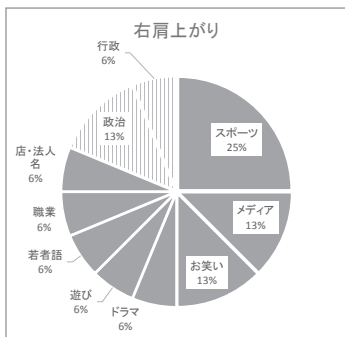


図16 右肩上がりの語の割合

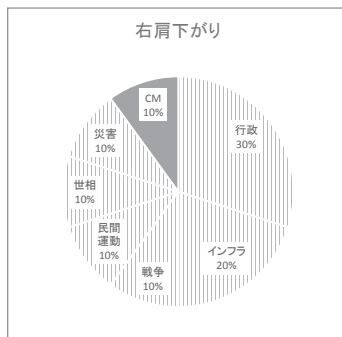


図17 右肩下がりの語の割合

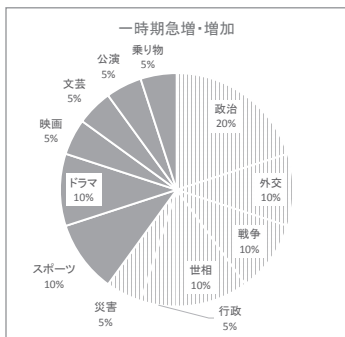


図18 一時期急増・増加の語の割合

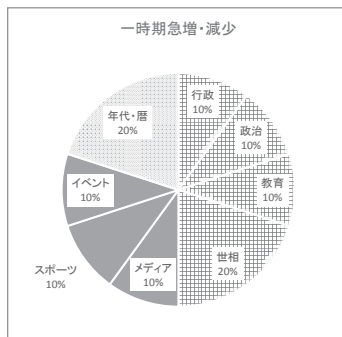


図19 一時期急増・減少の語の割合

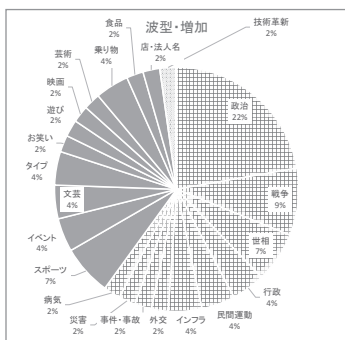


図20 波型・増加の語の割合

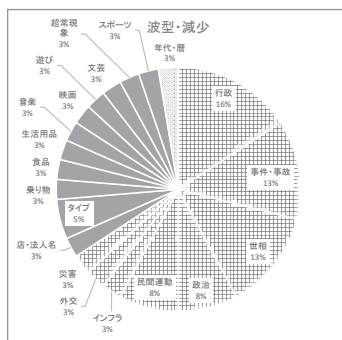


図21 波型・減少の語の割合

図16の右肩上がりの折れ線グラフは、年々増え続けており特に定着度の高い語であるが、これだけが大衆文化の語が圧倒的に多い。これは、4-4の図8で、「定着しやすいジャンル」の種類の数が大衆文化よりも大衆文化のほうが多かったという結果とも似通っている。それ以外の図17～図21の5種類の折れ線グラフについては、全て社会問題の語のほうが多くなっていた。

4-7. γ の各ジャンルの全体に占める折れ線グラフごとの割合

また、4-6で示した γ の折れ線グラフの種類ごとのジャンル割合について、次はジャンルごとにどの折れ線グラフが最も多いのか、各グラフの比率はどうなっているのかを明らかにしたいと考える。そのために、折れ線グラフごとのジャンルの語数を各ジャンルの合計数で割って、ジャンルごとに、 γ における各ジャンルの合計数に占める折れ線グラフの種類ごとの割合を出した。それが表6である。

表6 γ の各ジャンルの全体に占める折れ線グラフごとの割合

ジャンル	合計	ノ	ㇿ	一時ノ	一時ㇿ	波ノ	波ㇿ	ジャンル	合計	ノ	ㇿ	一時ノ	一時ㇿ	波ノ	波ㇿ
スポーツ	11	36%		18%	9%	27%	9%	政治	20	10%		20%	5%	50%	15%
タイプ	4					50%	50%	行政	15	7%	27%	7%	7%	13%	40%
文芸	4			25%		50%	25%	世相	13		8%	15%	15%	23%	38%
乗り物	4			25%		50%	25%	戦争	7		14%	29%		57%	
お笑い	3	67%				33%		民間運動	6		17%			33%	50%
ドラマ	3	33%		67%				事件・事故	6					17%	83%
映画	3			33%		33%	33%	インフラ	5		40%			40%	20%
イベント	3				33%	67%		外交	4			50%		25%	25%
メディア	3	67%			33%			災害	4		25%	25%		25%	25%
店・法人名	3	33%				33%	33%	教育	1				100%		
遊び	3	33%				33%	33%	病気	1					100%	
食品	2					50%	50%	年代・暦	3				67%		33%
CM	1		100%					技術革新	1					100%	
音楽	1						100%								
芸術	1					100%									
公演	1			100%											
若者語	1	100%													
超常現象	1						100%								
職業	1	100%													
生活用品	1						100%								

次に、表6をもとに、1つの折れ線グラフに傾向が偏っているのか、2つ以上の折れ線グラフに傾向が分散しているのかを検討する。

各ジャンルの中で、最も割合の高い折れ線グラフと他の折れ線グラフとの割合の差が2倍以上あり、その折れ線グラフへの傾向が特に強いジャンル（例：「お笑い」「政治」など）と、傾向が分散していて抜きで傾向がないジャンル（例：「スポーツ」「世相」など）の2種類に分け、表7・8にまとめた。

表7 1つの折れ線グラフに傾向が偏っているもの

	ジャンル/割合						
右肩上がり↗	若者語/100%	職業/100%	お笑い/67%	メディア/67%			
右肩下がり↘	CM/100%						
一時期急増↗	公演/100%	ドラマ/67%	外交/50%				
一時期急増↘	教育/100%	年代・暦/67%					
波↗	芸術/100%	病気/100%	技術革新/100%	イベント/67%	文芸/50%	乗り物/50%	政治/50%
波↘	音楽/100%	超常現象/100%	生活用品/100%	事件・事故/83%			

表8 2つ以上の折れ線グラフに傾向が分散しているもの

ジャンル	↗	↘	一時↗	一時↘	波↗	波↘
スポーツ	36%		18%	9%	27%	9%
映画			33%		33%	33%
タイプ					50%	50%
遊び	33%				33%	33%
店・法人名	33%				33%	33%
食品					50%	50%
行政	7%	27%	7%	7%	13%	40%
戦争		14%	29%		57%	
民間運動		17%			33%	50%
世相		8%	15%	15%	23%	38%
インフラ		40%			40%	20%
災害		25%	25%		25%	25%

表7の1つの折れ線グラフに傾向が偏っているジャンルは、その折れ線グラフのような変化をしやすいということを意味する。例えば、「お笑い」や「メディア」のような右肩上がりの傾向があるジャンルは、特に定着度が高い、「ドラマ」や「外交」などの一時期急増の傾向があるジャンルは、一極集中で流行りやすい、などのことが考えられる。ただし、右肩上がりの「若者語」や「職業」、一時期急増の「公演」などは、は表6の合計を見てわかるように1語のみであり、このようなものは検討に注意が必要である。

4-8. 法則性について

4-8-1. ジャンルごとの分析

ここでは、4-4と4-7の分類結果の考察を、ジャンルごとに行う。全てを紹介することは紙幅の都合上不可能なため、本稿では大衆文化・社会問題・その他の大区分の中から2つつ抜粋して紹介する（ジャンルの前の数字は、4-8-2と対応するジャンルの番号である）。その際、「γでは～」以降で4-7の考察結果を述べている。

【大衆文化的要素の強いジャンル】

①スポーツ：競技の名前そのものは明治や大正から使われ続けているが、選手の発言や技名などで残っているものは平成に入ってからのもが多い。α・βに含まれるスポーツの語も選手の発言がほとんどであるため、今後も残っていくとは言い切れないかもしれない。

γでは、右肩下がり以外の全てのグラフにバランスよく分かれており、偏りがなかった（例：M27/野球、M42/マラソン、H5/Jリーグ、H5/親分、H27/トリプルスリー、など）。

- ②お笑い：芸人が無意味な音を独特の動きやニュアンスで発する面白さによる流行語が多いため、その動きやニュアンスが忘れられると必然的にその言葉自体も使われなくなってしまふ。γでは大きく減少することなく増加し続ける（例：S4/彼氏、H28/PPAP）語が多い。ただ、「PPAP」に関しては2016年に生まれたばかりの語であるため、現在は定着していることを示す結果となっているが、今後も定着度が高いとは言い切れない。

【社会問題的要素の強いジャンル】

- ②政治：もともとあった言葉が政治家の発言や政策により流行したり（例：H16/サプライズ）、他に代わりようのない言葉が生まれたり（例：H7/無党派）するケースが多いため、流行が終わっても定着しやすい。だが、政治問題に関する新語はその問題の概要を知らなければ意味の分からない造語も多いため、そういった言葉は問題の風化とともに消えていく。γでは、年によって使用頻度に波はありながらも、全体としては使われ続けている語（例：M18/内閣、T9/普通選挙など）が多い。また、「H15/マニフェスト」「H24/第3極」のように、普段も使われているが時折爆発的に話題になる語もある。
- ②行政：「行政により制定された語であり、使用の必要性のある語」であるため、定着する語が特に多い。ただ、現在は廃止された制度や戦争に関する言葉は、消えつつあるようである。γでは、年によって差が激しく、全体としては減少傾向にある語（例：M4/郵便、S2/モラトリアムなど）が多い。だが、「M4/郵便」「T1/大正」「S9/国防」は、最低でも年400回以上使われているため、現在の定着度は極めて高いといえる。

【その他】

- ③年代・暦：「二十世紀」のように古代から決まっていたり、「ゴールデンウィーク」のように民間から広まって“5月の連休”を意味するようになったりと、他に言い換えようのないものが多いため、定着しやすい。γでは、もともと安定して使われていたが、一時期爆発的に流行しその後元に戻ったため、全体としては減少傾向にある（M9/世紀、M34/二十世紀）。だが、減少傾向にあるといっても、世紀の変わり目に爆発的に話題になった年と比べれば減っているというだけで、近年も「世紀」は年間2000回以上、「二十世紀」は年間200回以上使われているため、定着しているといつてよいだろう。
- ③技術革新：発明時は盛り上がるが、その後は専門用語として一般的には使われづらくなる傾向が強い。γでは、年によって使用頻度に波はありながらも、全体としては使われ続けている（H24/iPS細胞）。

4-8-2. 定着する語・死語になる語の法則性

次に、4-8-1の結果から、ジャンルごとに、どのような語が特に定着しやすいのか、あるいは、死語になりやすいのかを簡潔にまとめる。先行研究では、寺川・浅井（2001）や上村（2014）のように、定着・死語になりやすい語が同じジャンルの中で混在することはないと述べられていた。しかし、本稿の調査では、死語になりやすいジャンルでも、例外的に定着している語も見受けられ、そういったジャンルは定着しやすい語と死語になりやすい語の両方にま

たがるという結果になった。

◎特に定着しやすいもの

＜大衆文化的要素の強いジャンル＞

- ①【スポーツ】競技名や大会名、現在も活躍中の選手名やチーム名、元から存在したが選手の発言で話題になった語
- ②【お笑い】日常語で使いやすく、元ネタが忘れられても使われている語
- ③【ドラマ】内容自体は忘れられても日常的に使いやすいセリフ、放送前から使われていた語
- ④【CM】放送される前から日常語で使われていたセリフ
- ⑤【映画】今も続いているシリーズもののタイトルや、元ネタの内容は忘れられても日常語に取り入れられた語
- ⑥【音楽】もともと日常語で使われており、曲の歌詞で一時的に話題になったもの
- ⑨【芸術】芸術関係の専門用語
- ⑩【公演】現在も活動中の劇団名
- ⑪【イベント】定期的に行われているイベントの名称
- ⑫【タイプ】現在も一定数存在するタイプの人々を指す言葉
- ⑬【文芸】ベストセラー本の題名が本の内容と関係なく日常語になった語
- ⑰【遊び】余暇の過ごし方として当然になっている語や、趣味の団体名につけられやすい語
- ⑱【職業】現在も活躍している職業の名称
- ⑲【メディア】情報伝達手段として現在も大多数に使われるメディア
- ⑳【店・法人名】発祥当時から変わらない店の形態や会社名
- ㉑【食品】ロングセラーの食品名
- ㉒【生活用品】普段の掃除に欠かせない生活用品
- ㉓【乗り物】名称が変わらず現在も移動手段として日常的に使われるもの

＜社会問題的要素の強いジャンル＞

- ㉔【政治】元から使われていたが政治家の発言や政策により流行した語や、他に代わりようのない新しく生まれた政治の専門用語
- ㉕【行政】行政により制定され、使用せざるをえない語
- ㉖【外交】流行前から外交に関係なく使われていた語や、今現在も継続中の外交問題に関する語
- ㉗【戦争】第二次世界大戦中に頻繁に使われた、当時を象徴するような言葉
- ㉘【民間運動】名称が変わっていない、労働問題に関する抗議運動の名称や、現在も支持者の多い思想の名称、国への大規模なデモ運動
- ㉙【事件・事故】元から事件、事故関係なく日常語で使われていた語や、頻繁に類似の問題が起こる語
- ㉚【世相】生まれた当時と同じような世相が続いていて、他に代わりようのない語や、常識として大多数が知っている過去の世相語

- ③③ 【インフラ】 設置当時から名称が変わらず、現在も使われるインフラの名称
- ③④ 【病気】 毎年流行する流行り病の名称
- ③⑤ 【災害】 現在も起こりうる災害自体の名称や、大きな災害が起こる度に思い出される語

〈その他〉

- ③⑧ 【年代・暦】 古くから決まっており、代わりようのない年代や暦を表す語
- ③⑨ 【技術革新】 近年開発されたばかりで度々話題になる技術革新の専門用語

×特に死語になりやすいもの

〈大衆文化的要素の強いジャンル〉

- ① 【スポーツ】 選手の発言や技名
- ② 【お笑い】 芸人が無意味な音を独特の動きやニュアンスで発する面白さによるネタ
- ③ 【ドラマ】 ドラマ自体の流行が終わると日常的には使いにくい劇中セリフ
- ④ 【CM】 テレビ放送が終了したCMのセリフ
- ⑤ 【映画】 昭和以前に流行した映画のタイトルや劇中セリフ
- ⑥ 【音楽】 昭和以前に流行した音楽のジャンルの曲の題名、歌詞の一節
- ⑦ 【アニメ・マンガ・ゲーム】 連載や放送の終了、ブームの落ち着きで話題に上がらなくなったアニメ・マンガ・ゲームのタイトル
- ⑧ 【ファッション・美容】 流行の終わったファッション・美容に関する語
- ⑩ 【公演】 明治時代に行われていた公演のセリフや上演内容そのもの
- ⑪ 【イベント】 現在は行われなくなってしまったイベントの名前
- ⑫ 【タイプ】 現在はなくなってしまったタイプの人々を指す語
- ⑬ 【文芸】 流行の終わってしまった本のタイトルや文中の言葉
- ⑭ 【若者語】 生みの親の若者自身が飽きて使わなくなってしまった若者語
- ⑯ 【超常現象】 目新しさがなくなり飽きられてしまった超常現象
- ⑱ 【職業】 別の名称に取って代わられた職業の旧称や、存在自体が無くなってしまった職業名
- ⑳ 【店・法人名】 形態の名前が変わってしまった店の旧称や、存在自体が無くなってしまった店の名前
- ㉑ 【食品】 販売終了した食品名
- ㉒ 【乗り物】 他の名称に変更された乗り物の旧称

〈社会問題的要素の強いジャンル〉

- ㉔ 【政治】 当該問題の概要を知らなければ意味の分からない造語
- ㉕ 【行政】 現在は廃止された制度や戦争に関する語
- ㉖ 【外交】 既に解決された問題や外国人の発言
- ㉗ 【戦争】 日露戦争に関する語
- ㉘ 【民間運動】 別の名称に取って代わられた、労働運動の旧称や、支持者がいなくなってしまった特定の思想に関する語

- ③①【事件・事故】当該事件の文脈でしか使いどころのないような発言・造語
 ③②【世相】その時々の社会の様子を的確に表していたものの、今や時代遅れになってしまった世相語
 ③③【インフラ】別の名称に取って代わられたインフラの旧称
 ③④【病気】本来存在しない、本当の病名をごまかすために造語された病名

〈その他〉

- ③⑤【天体】当時の世相を反映させた正式名称でない星の呼び方
 ③⑥【年代・暦】現在は使われなくなった、特定の時間を表す語

4-9. 最新の新語・流行語の未来

最後に、4-8の法則性をもとに、2018年の新語・流行語大賞ノミネート語の今後を予測する（本稿は2018年1月提出の卒業論文に基づき執筆している）。以下の下線部の語は、トップテンに入賞した語である。また、【 】内のジャンルは、4-2で示したジャンル分けに新語・流行語大賞ノミネート語を当てはめたものである。ただし、本稿で調べた語のジャンルに当てはまらない語や、ジャンルは同じでも今までにない性質の語がいくつかあり、それらは「？」や「お笑いに近い」などとした（例：「仮想通貨」「筋肉は裏切らない」）。

以下に、トップテンの語の中から抜粋した3つの語の考察結果を述べた後、2018年の新語・流行語大賞ノミネート語の予測一覧を「定着しそうor元の頻度に戻りそうな語」「死語になりそうな語」「どちらともいえない語」の三種類で示す。

- (4) (大迫)半端ないって【スポーツ】：選手自身の発言ではないが、大迫選手の代名詞となっているため、大迫選手が現役で活躍している間は使われるはずだが、引退すれば次第に忘れられていくだろう。
- (17) 災害級の暑さ【災害】：気象庁からの公式な発言であり、今後も2018年と同レベルの猛暑になれば使われていくだろう。よって、定着していくと考える。
- (31) #MeToo【事件・事故】：セクハラ被害自体は今後も無くなることはないと思われるため、そういった事件が起こる度に人々がこれを使って告発していけば定着するかもしれない。ただ、あくまでもTwitterをはじめとするSNS内の文章中でしか使えないハッシュタグの形態であるため、もし定着したとしてもSNSの利用者と非利用者の間では定着度に大きな差が生まれそうである。

○定着しそう or 元の頻度に戻りそうな語

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| (14) 計画運休【災害】 | (3) eスポーツ【スポーツ】 |
| (17) 災害級の暑さ【災害】 | (24) U.S.A.【音楽】 |
| (29) ブラックアウト【災害】 | (6) GAF A (ガーファ)【店・法人名】 |
| (1) あおり運転【事件・事故】 | (19) 首相案件【政治】 |
| (18) 時短ハラスメント(ジタハラ)【事件・事故】 | (15) 高プロ(高度プロフェッショナル制度)【行政】 |

×死語になりそうな語

- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------|
| (2) 悪質タックル【スポーツ】 | (8) ダークウェブ【事件・事故】 |
| (4) (大迫) 半端ないって【スポーツ】 | (21) スーパーボランティア【災害or事件・事故?】 |
| (20) 翔タイム【スポーツ】 | (5) おっさんずラブ【ドラマ】 |
| (22) そだねー【スポーツ】 | (10) カメ止め【映画】 |
| (26) なおみ節【スポーツ】 | (13) グレイヘア【ファッション・美容】 |
| (27) 奈良判定【スポーツ】 | (11) 君たちはどう生きるか【文芸】 |
| (32) もぐもぐタイム【スポーツ】 | (23) ダサかつこいい【若者語】 |
| (28) ひょっこりはん【お笑い】 | (16) ご飯論法【政治】 |
| (12) 筋肉は裏切らない【お笑いに近い】 | |
| (30) <u>ポーっと生きてんじゃねーよ!</u> 【お笑いに近い】 | |

△どちらともいえない語

- | | |
|-------------------|--------------------|
| (9) 金足農旋風【スポーツ】 | (31) #MeToo【事件・事故】 |
| (25) TikTok【メディア】 | (7) 仮想通貨【?】 |

SNS発の語である「TikTok」「#MeToo」や、実体が存在しない「仮想通貨」などについては、本稿の新聞記事データベースを用いた調査ではほぼ前例がなく、予測が難しかったため、「どちらともいえない語」にしている。

5. おわりに

5-1. まとめ

本稿では、定着する新語・流行語の法則性を明らかにするため、新聞記事データベースを用いて、明治～平成に流行した448語を対象に1年ごとの使用数を調査し、その結果をもとに様々な分類・分析を行ってきた。

まず、4-3では、 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ の大区分（大衆文化・社会問題・その他）ごとの割合をみると、 $\alpha \sim \gamma$ にいくにつれて社会問題のほうが多くなっており、大衆文化の語のほうが比較的死語になりやすく、社会問題の語のほうが残りやすいことがわかった（図2～図4）。

つぎに、4-4でジャンルごとの $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ の割合をみたところ、「特に死語になりやすいジャンル」では、大衆文化のジャンルが圧倒的に多く（図6）、「死語になる可能性が高いジャンル」では、大衆文化・社会問題・その他のジャンルがバランスよく含まれており、はっきりとした傾向は見られなかった（図7）。これは、4-3での考察結果である、 α では大衆文化が半数を超える（図2）、 β では社会問題と大衆文化がほぼ同じ（図3）結果と一致している。

しかし、4-4の「定着しやすいジャンル」では、トップの2つは社会問題のジャンルだが、ジャンルの種類ごとの数でみれば大衆文化のほうが多くなっている（図8）。これは、4-3の γ で、社会問題のほうが大衆文化より多かった結果（図4）と反しており、一概に社会問題のジャンルのほうが定着しやすいとは言えないようだ。

さらに、 γ （まだ使われている）の語に関しては、折れ線グラフの形によって6つに分類し（図10～図15）、それぞれに含まれるジャンルの割合をみた。すると、4-6で示したように、大衆文化の語が圧倒的に多いのは、毎年増え続けている右肩上がりの折れ線グラフ（図16）のみであった。これは、4-4図8の、「定着しやすいジャンル」の種類の数が大衆文化よりも大衆文化のほうが多かったという結果とも似通っている。それ以外の5種類の折れ線グラフでは、全て社会問題の語のほうが多くなっていった（図17～図21）。

以上のことから、単純に語の合計数を比較すると、社会問題のほうが大衆文化よりも定着しやすいが、ジャンルごとの比較や語1つ1つのこれまでの使用数の変化に着目すると、どのジャンルに属しているのかなどの条件によっては、大衆文化の語であっても社会問題の語に劣らず定着しやすい場合があるということがわかった。

また、4-7で、 γ における各ジャンルの合計数に占める折れ線グラフの種類ごとの割合を出した結果（表6）、以下のような定着しやすい語・死語になりやすい語の法則性を見出すことができた。

《定着しやすい語》

- ・大衆文化の中では、現在も流行・発生当時から名称が変わらず存在しているモノ・コト（スポーツの競技名や大会名、ロングセラーの食品名など）が非常に多い。次いで、流行の背景は忘れられても語だけが日常語に取り入れられたもの（お笑いのネタ、ドラマのセリフなど）、流行以前から使われており原義の使用頻度に戻ったもの（CMのセリフ、音楽の歌詞など）も定着している。
- ・社会問題の中では、流行以前から使われていたもの（政治家の発言や政策、外交に関する語）、頻繁に起こる問題に関する語（事件・事故、流行り病など）、発生当時から現在まで変わらず使われ、代替の利かない新語（行政に制定された語、名称が変わらないインフラなど）が定着している。戦時中の語や過去の世相語のように日常的には使いにくい語が残っているのは、新聞という媒体の特徴かもしれない。

《死語になりやすい語》

- ・大衆文化の中では、発言・セリフなどの音声や体の動きとの結びつきが重要なもの（スポーツ選手の発言や技名、独特の動きやニュアンスが要のお笑いネタ、明治時代に行われていた公演のセリフや上演内容そのものなど）が圧倒的に多い。次いで、流行が落ち着いたり（ファッション・美容、本のタイトルや文中の言葉など）、名称が変わったり（職業名の旧称、乗り物の旧称）、存在自体が消えてしまったり（終了したイベント、無くなった店の形態）したのも死語になっている。
- ・社会問題の中では、既に過去のものとなった問題に関するもの（廃止された行政の制度、既に解決された外交問題や外国人の発言など）や、名称が変わったもの（労働運動の旧称、インフラの旧称）、当時生きた人や概要を知っている人しか使えないもの（問題の概要を知らなければ意味の分からない政治問題の造語、当該事件の文脈でしか使いどころのない発言・造語など）が死語になっている。

また、最後に、今回判明した法則性を用いて、2018年の新語・流行語大賞にノミネートされた32語の今後の定着度を予測した。

定着しそうな語は、「計画運休」「災害級の暑さ」「ブラックアウト」「あおり運転」「時短ハラスメント(ジタハラ)」「首相案件」「高プロ(高度プロフェッショナル制度)」「eスポーツ」「U.S.A.」「GAFA(ガーファ)」の10語で、その内網掛けを付した7語が社会問題の語であった。

死語になりそうな語は、「悪質タックル」「(大迫)半端ないって」「翔タイム」「そだねー」「なおみ節」「奈良判定」「もぐもぐタイム」「ひょっこりはん」「筋肉は裏切らない」「ポーっと生きてんじゃねーよ!」「おっさんずラブ」「カメ止め」「グレイヘア」「君たちはどう生きるか」「ダサかつこい」「ダークウェブ」「スーパーボランティア」「ご飯論法」の18語で、その内網掛けを付していない15語が大衆文化の語であった。中でも、スポーツ関係の語が7語と多い。

つまり、2018年の新語・流行語の定着予測では、社会問題の語のほうが定着しやすく、大衆文化の語のほうが死語になりやすい、という結果であった。これは、本稿の調査で単純な語数で言えば社会文化の語の方が定着しやすいという結果と合致している。また、ジャンルでみると、定着しそうな語のジャンルは社会問題が4で大衆文化が3であり、社会問題と大衆文化のジャンル数が拮抗しているという結果であった。

以上のことから、語の数では社会文化の語の方が定着しやすく、一方でどのジャンルに属しているのかなどの条件によっては、大衆文化も社会問題に劣らないということが、2018年の新語・流行語を含め、本研究全体で明らかになったと言える。

また、トップテンの語のうち定着しそうな語は2つだけであり、「流行の大きさ=定着のしやすさ」ではない、ということが伺える。定着しそうな語も32分の10個であり、つまり全体の約3割しか残りそうになく、残りの約7割は消える可能性が高い。流行りやすく消えやすいという現代の世相を表しているようにも思えた。

5-2. 今後の課題

今回の調査では、データベースの仕様と時間の都合上、朝日新聞社の「聞蔵Ⅱビジュアル」のみを使用した。しかし、新聞のみだと「ぶりっ子」「しょうゆ顔」のような、筆者自身の内省では日常会話で使われる語が死語または消えかかっている傾向にあたり、逆に第二次世界大戦時にのみ使われていた語が消えずに使われ続けていたり、一部の語に関しては実際の定着度との隔たりを感じた。よって、今後はより口語の傾向が強い雑誌での調査も追加すべきだと考える。また、朝日新聞1社のみだと言葉の使い方に偏りがあるかもしれないため、上村(2014)のように他社の新聞や雑誌も調査していきたいと考える。

加えて、 $\alpha \cdot \beta$ の折れ線グラフの分析や、流行した時代による定着度の違い、語1つ1つの新聞記事での実際の使い方調査など、まだ研究の余地は大いに残っている。それらを行うことができれば、より詳細で正確な新語・流行語の定着の法則性がわかるのではないだろうか。

そしてなにより、今回予測した2018年の新語・流行語の定着度が、予測通りになるのか、それとも予想外の変遷をたどるのかは、最も気になる点である。可能であれば、10年後などにもう一度同様の調査を行い、予測の正確さを自分の目で確かめてみたい。

参考文献

- 上村健太郎 (2014) 「新語・流行語の使用の経年変化—Google Trendsと新聞記事データベースを用いて—」『明海日本語』19号、明海大学日本語学会、pp.11-20
- 寺川みち子、浅井里美 (2001) 「流行語—何が残り、何がなくなったか—」『東海学園国語国文』59号、東海学園女子短期大学国語国文学会、pp.14-30
- 水原明人 (1997) 「特集：流行語—いつ、なぜ、どうして？—<社会をうつす> 消えた言葉・消えない言葉」『国文学 解釈と教材の研究』42-14号、学燈社、pp.57-61
- 森下喜一 (1985) 『現代のことは』 双文社出版
- 米川明彦 (2002) 『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』 三省堂
- 米川明彦 (2013) 「日本語の攻防—語彙：若者語・流行語の戦い—」『日本語学 特集：ことばのデータ集—日本語教育編—』32-3号、明治書院、pp.84-91

参考WEB

- 聞蔵Ⅱビジュアル「朝日新聞1985～週刊朝日・AERA」(朝日新聞社)
<http://database.asahi.com/index.shtml> (2018.11.22)
- 「現代用語の基礎知識」選 ユーキャン新語・流行語大賞「第7回 1990年 授賞語～第35回 2018年 授賞語」(自由国民社)
<https://www.jiyu.co.jp/singo/index.php?eid=00035> (2019.01.13)
- 「現代用語の基礎知識 2018」(自由国民社) JapanKnowledge Lib
<https://japanknowledge.com/> (2018.11.22)
- 「デジタル大辞泉」(小学館) JapanKnowledge Lib
<https://japanknowledge.com/> (2018.11.22)
- 「日本国語大辞典 第二版」(小学館) JapanKnowledge Lib
<https://japanknowledge.com/> (2018.11.22)

(おおた・さえ)